

フィンランド叙事詩『カレワラ』を読む —文学作品としての叙事詩—

荻原 眞子

キーワード: エリアス・リョンロット、叙事詩、ワイナモイネン、老人、母親、神話、呪文

はじめに

「カレワラ」はエリアス・リョンロット(1802-1884)の編集創作になる文学作品である。リョンロットはフィンランドやカレリアなどの各地で吟唱詩人から聞き取った詩篇(物語)^①を自らの構想に即してモザイク状に組みあわせて一大叙事詩を創りあげた。それがフィン人の民族的叙事詩、フィンランドの国民的叙事詩として受容され、その後の多様な文化芸術の揺籃となり、今日にいたるまで伝承されてきている。「カレワラ」は口承文芸(抒情詩、叙事詩、呪文詩など)を基とする創作文学であり、かつフィン人の民族的精神の糧となっていることに大きな特徴があるといえよう。本稿では文学としての「カレワラ」の主題に焦点を当ててみたい。

用いるテキストは以下の2点である。

①森本覚丹訳 『フィンランド国民的叙事詩 カレワラ 上・下』講談社学術文庫 1992 (1983)

②リョンロット編・小泉保訳 『フィンランド叙事詩 カレワラ 上・下』岩波書店 1976

I カレワラの構成

カレワラの成立などについては上記のテキスト①、②の解説に従うこととする。

「カレワレ」には『原カレワラ』(16章、1833年)、『古カレワラ』(32章、1835年)、『新カレワラ』(50章、1849年)の3篇がある。これはE.リョンロットがフィンランドやロシア北方のカレリアの各地で吟遊詩人から新たに入手した詩篇を付加編纂したことによる。いわゆる「カレワラ」として広く知られているのは最後の『新カレワラ』である。そして、森本覚丹、小泉保の邦語訳はいずれもこの『新カレワラ』50章である。「カレワラ」の構成は、その主題によって「ワイナモイネン・サイクル」、「レンミンカイネン・サイクル」、「結婚歌謡」、「クッレルボ・サイクル」から成り立っているが、なによりも留意すべきは、この四つのサイクルが本来それぞれ独立した伝承としてあったことである。その四つのなかでもっとも大きな比重をしめているのが、「ワイナモイネン・サイクル」であるが、これにはワイナモイネンを中心とする数多の詩篇が含まれ、そのテーマによって、1) サンボ・サイクル、2) ワイナモイネン・サイクル、3) カンテレ・サイクルが区別され、この三つを合わせて、「大サンボ・サイクル」と称されている。そして、各サイクルには、また、少なからぬ物語・詩篇が

含まれるが、それらは 50 章のなかの処々にちりばめられ、「カレワラ」は全体としてワイナモイネンを中心とする叙事詩に纏め上げられている形になっている。換言するなら、そこに編者リョンロットの作為があるということになる。とはいえ、本来、ワイナモイネンと無縁だと考えられる（実際、明らかなことであるが、）サイクルが「結婚歌謡」と「クッレルボ・サイクル」である。しかしながら、前者ではレンミンカイネンの婚礼に招かれて、カンテレを奏して祝福するという役割がワイナモイネンに与えられてはいるが、それは明らかに編者の演出によるものと見られる。この「結婚歌謡」は実際にカレリアに伝えられていた花嫁の哀泣歌を反映している。また、「クッレルボ・サイクル」はまったく独立した伝承であり、ウンタモ・カレボ兄弟の争いのなかで生まれた薄幸な勇士クッレルボの悲惨な生涯の物語である。ここにはワイナモイネンは登場しない。

このように見るなら、「カレワラ」はすぐれた吟唱詩人から採録した詩篇を巧みに織り込んで創りあげられたことが明らかであるが、織り手であるリョンロットは何を経糸としたのであろうか？これについても多くの議論があるようであるが^②、筆者はそこに「老人」、「母親」、「結婚」という三つライトモチーフを見てとることができるように思う。

Ⅱ ワイナモイネン^③ — 「老人」の主題

1) 老ワイナモイネンの誕生

「カレワラ」の序章では大気の処女イルマタルが海洋に降りて風に孕み、小鴨の卵から天地創造がなされ、長い年月の後にやがて老人ワイナモイネンが誕生するいきさつが謡われる。^④

かくて藍き蒼海の面を、沸き立つ大波の波頭を、嵐はその処女を揺り動かし、波はその乙女を駆り進めぬ、風が彼女のまわりに精を注ぎ、海が彼女の中に生命を造りしまで。

ところが子供はなかなか生まれようとしない。

七世紀の永き間、人一生の九倍も永きあいだ。されどなお子供は生れず、、、かくて彼女、水の母親は、東へ泳ぎ、西へ泳ぎ、南へ泳ぎ、北へ泳ぎ、、、

身ごもった乙女は常に水の上を漂っている。そこへ一羽の小鴨が飛んできて、巣をつくるべき場所を探し求める。

されば海の母親は、水の母、大気の乙女は、海よりその膝を上げ、、、かの小鴨をして巣を造らしめる。膝の上で抱かれた卵がやがて水に落ちて割れると、そのかけらから大地、天穹、日月や雲ができる。それからまた、

九つの歳が過ぎ去り、十度めの夏が来たりける時、彼女は海より首を上げて、彼女は顔を現して、それより創造を始め、この世に秩序をもたらしぬ、つまり、岬、海中には魚のための洞や深み、浜辺や入り江、暗礁、島や丘をつくる。それでも未だにワイナモイネンは生まれない。

不滅なる吟唱詩人は産れざりき。老いて不拔なる、ワイナモイネンは三十回の夏の間、三十回の冬の間、母の身内に在りたりき、常に静かな海の上にて、波の泡立つ海の上にて。いよいよ、ワイナモイネンはこう語る。

「月よ助け給え、陽よ我を逃し給え、大熊星よ助言を藉し給え、、我が住えるこの小さき巢より、かくも狭き住居より、陸地へこの流浪者を導き給え、大気の中へ我を案内し給え、、」

そして、自らの手で母の子宮から逃れ出て、海の水のなかに生まれ落ちる。それからなおも、彼は五歳海にとどまり、五歳待ち、六歳待ち、また七歳、八歳も待ちぬ。名も知れぬ海角のほとり、不毛なる陸地に近き、大海原の水の面にやがて陸地に膝をつき、腕に身を支えて立ち上がる。

優婉なる月の光を見るために、快き陽の光を楽しむために、大熊星を仰ぎ見るために、空に輝く星を視るために。かくも古昔のワイナモイネンは、永久に名高き吟唱詩人は、神聖なる創造の母より産れ、彼の母、イルマタルより生まれたり。

つまり、「カレワラ」の主人公ワイナモイネンは天地創造のはじめに大気の母、海の母に宿り、限りなく長大な時間を経て、自ら生まれて、陸に上がって天を頂く。その呼び名は「強固な老ワイナモイネン」、「老いて不拔なるワイナモイネン」である。叙事詩の主人公がそもその誕生まで相当の年月を経て海中に生まれ、そこでも長い年月を過ごして後ようやくにして大地に踏み立つ。この長い年月を経ること、老人であることにはどんな意味合いが込められているのであろうか。

2) 智慧者・呪師

「カレワラ」の第三章ではワイナモイネンはボホヨラの若い歌い手ヨウカハイネンの挑戦を受けて、呪誦競べをおこない、若者を窮地に陥れる。事の次第は以下のようなものである。

若いヨウカハイネンは老ワイナモイネンに向かって浅薄な知識をひけらかし、それを嘲笑される。ワイナモイネンは若者に「いと深き知恵の言葉を語れ、いでや久遠なる事を語れ」と迫る。深き知恵とは深い根源、事物の本源、いうなれば神話である。ヨウカハイネンが創世のはじめを語り、

「されば我れは六人の偉傑の間に伍し、我はみずから彼らの七番めとなりぬ」

と言ったとき、ワイナモイネンはその虚言を非難する。すると若者は刀での決闘を挑む。激昂したワイナモイネンはそこで歌いはじめ、「知恵の言葉、髯ある英雄にふさわしき歌」を歌う。

湖水は波だち、大地は震え、銅山は震動し、巨岩は反響し、山々は裂け割れて、浜の真砂は砕けたり。

さらに、ヨウカハイネンに向かって歌い、その櫓を木々や湖水、剣や弩を稲妻や虹に変え、身に着けていた帽子や手袋、上衣は雲や雪などにし、若者を泥沼に沈める。ここに至って、ヨウカハイネンは

訴える。

「おおいとも賢きワイナモイネンよ、おおいとも古き魔法使いよ、おん身の魔法の呪文を解き給え^⑤、おん身の魔法の歌を反し給え、我をこの恐ろしきところより逃したまえ」

3) アイノの死

ヨウカハイネンはその苦境から逃れるためワイナモイネンに対してさまざまな代償を申しでるが、後者はそれをことごとく拒絶する。最後にヨウカハイネンが自分の妹のアイノを捧げると言ったとき、ようやくにしてワイナモイネンはその呪縛を解くことに同意する。やがて、

(第四章) 森のなかでワイナモイネンはアイノに出会い、求婚する。アイノは拒み、家へ逃げ帰って、泣き悲しむ。そして、このワイナモイネンが婿となることを喜ぶ母親に対して、こう告げる。

「我れの泣くは、、、その弱き歩みを助け、常にかしずき侍りて、年寄の玩具^{おもちゃ}となるよう、老人の慰み者となるよう、おん身が自ら我れに誓わせ、おん身が娘に望むためなり。」

乙女はある朝、三人の乙女とともに入り江に沐浴にいき、水に沈む。その知らせは野兎によって母親にもたらされる。

老いて不拔なるワイナモイネンもまた、乙女の死を嘆き悲しみ、「夕べに泣き、^{あした}晨に泣き、永き夜を泣き明かす」。アイノの水死は老人ワイナモイネンに嫁することを悲嘆する余りの自死のようにも受けとられそうであるが、実は偶然の出来事として語られる。(第五章) 魚と化してワイナモイネンの前に現れたアイノはこう告げる。「我れは鮭にも非ず、水底の鱸^{すずき}にてもなし、おん身が終生憧る、おん身が永らく欲みてし、可憐な若き乙女なり、若きヨウカハイネンの妹なり」と身を明かす。そして、「ああおん身憐れな老人よ、知恵なき、ワイナモイネンよ、おん身はウェルラモの若き水精女^{みずおめ}を、アフトの愛らしき子供なる我れを、留め置く知恵をもたざりき！」と云って、水のなかに姿を消す。つまり、知恵者・老ワイナモイネンは若き乙女から老人であること、老齡の愚昧さをなじられのである。

ワイナモイネンは己の不覚を嘆き、亡き母を想う。叡智に優れ、人智の極みに通じているはずの「老いて不拔なる」知恵者は亡き母に生きる術を教えてくれるように訴える。これについては「母親」のところで触れることにしよう。

4) 果たせぬ求婚 — ポホヨラの乙女

(第六章) ワイナモイネンは母親の忠告に従ってポホヨラへ出発するが、その途中待ち伏せていた恨みを買ったヨウカハイネンに狙撃されて海中に落ち、(第七章) 漂流しているとき鷺に助けられてポホヨラの地に運ばれる。そこで女主人ロウヒに庇護される。故郷へ帰りたいがるワイナモイネンにロウヒはポホヨラの地でサンポ^⑥を鑄造するなら、娘を嫁に授けようと云う。ワイナモイネンは鍛冶のイ

ルマリネンを遣わそうと約する。

(第八章) 故郷へ帰る途中で、ワイナモイネンは麗しきポホヤの乙女に会い、自分の櫓に誘う。乙女は「嫁になることは決して好からず」と云って、拒絶する。なおも、執拗に言い寄るワイナモイネンに乙女はいくつかの難問を仕かけるがワイナモイネンはそれを事もなく解決する。乙女は最後に「わが紡錘の小片もて、わが桴の小片にて、小舟を作り、その小舟を海に浮かばせた給うなら」という条件で結婚の承諾を与える。ワイナモイネンはその小舟の製作をはじめめるが、3日目に斧が逸れて膝に当たり、その傷から血しぶきが噴き出る。(第九章) ワイナモイネンは出血を止める鉄の呪文を思い出すことができず、それを知るものを尋ね歩く。ようやくにしてある老人の元で、「鉄の由来」が謡われ、止血の呪文が唱えられて、傷は癒える。

(第十章) ワイナモイネンは鍛冶のイルマリネンをポホヨラに遣わす。イルマリネンはサンボを鑄造してロウヒの女主人の要求を満たすと、約束された乙女を求めるが、彼女はまだ結婚するつもりはないと言って断る。イルマリネンは落胆し、ワイノの地、故郷へ帰る。

(第十六章) ワイナモイネンは舟造りに取りかかるが、舟のいくつかの部位を造る呪文が分からず、それを求めて死者の世界トゥオネラへ下り、(第十七章) 次いでアンテロ・ウィブネンのもとへ出かけて呪文を聞き取って舟を完成させる。(第十八章) それに乗って再びポホヨラへ求婚の旅に出る。同じ目的で鍛冶のイルマリネンは櫓で出かける。ポホヨラの女主人は娘に婿として「汝はワイノラの大英雄を選べよ、彼は多くのものを舟に積み来り、財宝の積荷を^{もたら}齎せる故」という。ワイノラの大英雄とはワイナモイネンのことである。乙女は母親にこう答える。

「我れは財宝にも意をかけず、知恵深き男をも意に止めず、我れは額の秀でし人を、^{ようす}姿態美しき人を^{おも}欲うなり。」

「我れはワイノラの人を選ばじ、老人の思いを止めじ、老人はうるさくして、この我を困らしむべければ」

そして、約束の舟を作ってやってきたワイナモイネンの求婚に乙女はこう告げて拒絶する。

「我れは想いをかけじ、船人らに、風は彼らの心を大海へ駆り、彼らの思いは東風を悲しむ、されば我れはおん身に従うを得ず、おん身の心が海に向かいいる故に」

さて、(第十九章) 後からやってきた鍛冶のイルマリネンはポホヨラの女主人から難題を課せられる。乙女の援けをかりてそれを克服し、晴れて結婚を認められる。希望を絶たれたワイナモイネンは悲しみのうちに故郷へ旅する。

「哀しいかな、憐れなる者よ、人は若き日に娶り、生涯の伴侶を選ぶべきことを、我れの早く学ばざりしとは。その子供らの世話をなすべき、その家族らの世話をなすべき、若い日に早く結婚せざれば、すべて不幸とはなりぬべし」

かくて、ワイナモイネンは老人であることの悲哀を嘆き、悔恨の念に浸る。神話学の上ではワイナ

モイネンが人であるのか神であるのかというような議論がなされているが、このように眺めるなら、この「カレワラ」の中心人物は人の世における老人の卓越性と悲哀とを象徴的に体现しているのだと捉えられよう。そして、老人・男性に対置されるのは母親と乙女である。

Ⅲ 「母親」の主題

1) ワイナモイネンの母 — 叡智と慈愛

(第五章) 老いて不抜なるワイナモイネンは嫁となるはずの憧れの乙女アイノを失ったとき、身の処しかたを思い余って亡き母に問いかける。

「我が母の今生きまさば、我が老母の蘇り給わば？ 不吉なる今この時に、この深き消沈のときに、悲嘆が我を圧伏せざるよう、煩悩をいとよく支え得る方法を、^{てだて}実にしかと我に語り聞け給わんものを」

解釈はともかく、テキストでは、次のように語られる。

彼の母は墓場より蘇り、海の下より答えぬ、

「汝はポポヤの娘らを^{もと}索めよ、その地の娘らは殊に美しく、されば、おお息子よ、汝の妻を、ポホヤのいと美しき乙女らより^と択れ、^{みめかたち}容貌うるわしき、また姿の愛らしき、その脚の常に^{きと}敏き、^{ふるまい}挙動の常に浣漑たる乙女を選べ」。

この一節は印象的である。「老いて不抜なる」息子ワイナモイネンに、亡き母は墓から導きを与えたというのである。それは子供に対する「母親」という存在の永遠性を示しているといえはしまいか。そして、母は老いたる息子に求むべき嫁の理想像を示すのである。「カレワラ」のこの一節が人口に膾炙されるとき、母親（だけではないかもしれないが）が求める嫁として人は共感を覚えよう。しかしながら、嫁となる乙女にとっては「老人」も「母親」の理想も相容れることにはならない。アイノは老ワイナモイネンに嫁すことについて「母親」に抗い、ポホヤの乙女は「老人」に嫁すことの不快をあからさまに口にする。編者リョンロットがしつらえた経糸は決して特殊ではないこの普遍的な人生観にあるといえよう。

2) ヨウカハイネンの母・アイノの母 — 悲哀

(第三章) 北方のポホヤにいるラップの若い歌い手ヨウカハイネンはワイナモイネンのうわさを聞いて、歌を競うために出かけようとして、母親を訪ねる。父母は若者の無謀を牽制する。

「彼は正しく汝に向かいて歌わん、汝を呪逐し、汝の口と頭を積もれる雪の中に埋め、
汝の手を激しき^{ふぶき}暴風雪の中に埋めん、汝の四肢が^{こわば}硬りて、動かざるようなり果つるまで」
それに耳をかさずに、息子は出かけ、案の定ワイナモイネンのために窮地に陥れられる。そして、苦しまぎれに妹アイノを代償とするとして、解放される。ヨウカハイネンは萎れ、涙ながらに妹を人

質にしたことを告げる。母は飲んで云う。

「吟唱者^{うたいで}ワイナモイネンが、我が娘の夫となるように、我れは永らく秘かに望み、常々欲^{おち}いいたりし故に」

(第四章) しかし、娘アイノはそうではない。悲嘆にくれ、森でワイナモイネンに出会ったのち、乙女たちと水浴びに行つて溺死する。その悲しみは森の鳥獣もが分ち合う。母親は郭公を聴いて言う。

「不運なる世の母親は、郭公の鳴声を聴くことなかれ！郭公の鳴声を聞く時、我が鼓動は暗く打ち、我が眼より涙は出で、我が頬を涙は伝い、豌豆のごとき涙の粒は、いと太き蚕豆^{そらまめ}よりも容^{かさ}を増す。郭公の鳴声を聞きしより、少しずつ我れは老いゆき、少しずつ生命は縮まり、我が力は衰え果てぬ」

(第六章) ヨウカハイネンはワイナモイネンに復讐をすべく鉄の弩を造って待ち伏せする。そこへ母親がやってきて、思いとどまらせようとする。

「もし汝がワイナモイネンを射ち、カレワライネンを射殺さば、歓びはこの世界より消え、歌はこの地上より滅ばん、」

しかし、息子ヨウカハイネンは頑固に邪な企てを実行する。勝鬨を挙げる息子に老母は言う。

「かくスワントラの英雄を、ワイナモイネンを射ち、カレワライネンを殺すとは、まことに悪しきふるまいぞや」

ここでは母親は二重の悲劇に見舞われる。老ワイナモイネンを理想の婿と願った娘アイノは絶望のうちに溺死し、自分たちのことばに耳をかそうとしない息子ヨウカハイネンは妄想と執念に駆られて世の英雄ワイナモイネンを殺める。娘や息子に背かれる母親の悲劇、悲哀もまた人生である。

3) レンミンカイネンの母 — 命の守護者

レンミンカイネン・サイクル(第十一章～第十五章)もまた大サンポ・サイクルすなわちワイナモイネン・サイクルとは別個で独立している。レンミンカイネン別名アフティ、カウコとも呼ばれるやぐざ息子はサーリの権門、巨富の氏族の乙女へ求婚に行こうとする。若者の母親は息子を押し止める。

「我が子よ、我れのいとし子よ、身分高きものを娶ることなかれ。サーリの権門の中には、汝を尊ぶ者あらじ」

ところが、息子は己の端麗な容姿のゆえに乙女の眼がねに叶うだろうという。すると、

「かの地の乙女らはすべて汝を軽蔑し、女らは汝を嘲笑^{あざわら}うべし、」

「もし汝がサーリの婦人^{なづ}ら^をを、その貞節なる乙女らを辱めば、汝は自ら争いをひき起し、恐しき戦は次いで起らん。」

息子と母親のやり取りはなおも続くが、この母親の予言はやがて現実となる。

(第十一章) レンミンカイネンはサーリへ出かけ、乙女たちの中にいたサーリの名高き花、クッリ

ッキを捕らえ自分の櫓の中へ押し込めて連れ帰る。レンミンカイネンとクッリッキは「争い事をしない」、「村へ踊りに行かない」と誓約を交わして結婚する。レンミンカイネンの母は美しい花嫁をほめ讃え、祝福する。(第十二章)ところが、あるとき、嫁は村へ出かける。それに憤慨したレンミンカイネンはポホヤへ、ラップランドの若者を征服する戦いに行こうとする。母親は自分の家には金銀財宝はあると云い、必死になって息子を制止しようとする。

「行くなかれ、おお取て行くなかれ、かのもの淋しき冷たき村へ、ポホヤのもの憂き土地へ。そこにては破滅が実に汝を待てり、禍^{わざわ}いが汝を待てり、不幸、破滅が、元気なるレンミンカイネンを！」

その時、レンミンカイネンは髪を梳いていたが、その刷毛を壁に投げつけて、「この刷毛より血が滴り、血が流れるとき、それは自分の破滅のときだ」と告げて、ポホヨラへ出立する。

そうして先ずは呪法の歌を歌い、「いともよき歌手を、いと拙き歌い手となし、彼らの口に^{こいし}礫を食ませ、いと巧みな魔法師や、いと秀でたる歌手の上に、うず高く岩を積み上げ」た。ついで人々に呪いの歌を浴びせかけて、殲滅してしまう。ただ一人、「老いて、^{めしい}盲て目の見えぬ、放埒な羊飼いを生かして呪詛する。その羊飼いまるかハッツはトゥオネラの深き河、渦巻きのところへ走り、そこでレンミンカイネンを待ち伏せる。

(第十三章) レンミンカイネンはポホヨラの老主婦にその娘を嫁に所望する。老主婦は「ヒイシの^{おおしか}麁を獲ったなら」と条件を出す。レンミンカイネンは雪靴を履いて雪原に麁を追い、それを捕らえるが、逃げられ、雪靴は破れてしまう。(第十四章) レンミンカイネンは森の神々に祈願してついに麁を捕らえる。そして、老主婦ロウヒに「いでやおん身の娘を与え給え、我が望める若き花嫁を与え給え」というが、彼女はさらに「ヒイシの牧場で栗毛の駿馬、ヒイシの猛き驛馬を、強き去勢馬を捉える」ことを求める。レンミンカイネンはその馬を捉え、「その口に^{はみ}馬銜を銜ませ、銀の勒をかけ、それに打ちまたがってポホヤの屋敷へ戻ってくる。そして、老主婦に「おん身の娘を給え」と望むと、彼女はさらに「トゥオネラの河の渦巻で白鳥を射るなら」という。こうして、レンミンカイネンはいよいよ破滅の時を迎える。すなわち、その河辺で待ち伏せしていた老羊飼いの矢に射たれ、羊飼いはレンミンカイネンを河の渦巻の中に投げ込む。そしてトゥオネラ(死者の世界)の息子は剣で彼を切り刻でトゥオネラの流れに投げ込む。

(第十五章) 息子の行方を案ずる母親と嫁クッリッキとは、ある日刷毛から血が滴り落ちていることに気づく。母親はポホヨラへ馳せ参じて、老主婦から息子がトゥオネラへ白鳥狩りに行ったことを聞き出す。

それより母はその迷える者を^{たず}索ねたりき、不幸が既におこりたるやと気づかいつつ、狼のよう沢地を通り、熊のよう荒地を横ぎり、獺のよう流れを泳ぎ、^{あなぐま}糺のよう野原を横ぎり、^{はりねずみ}狷のよう荒れ野を通り、兎のよう湖畔を走り、途の上より岩を押し除け、坂より幹

を押し倒し、灌木を路傍へ押し除け、路の上の枝を折り棄てて、その行方を樹々に尋ね、道に問い、月に聞く。太陽が息子の不幸を教える。すると、レンミンカイネンの母親は鍛冶のイルマリネンの許へ行って、「歯は鋼鉄、歯の長さは9尋、柄の長さを5尋の銅の柄の熊手」を造ってもらい、それを手にトゥオネラの川へ急ぐ。そして、川の深みに入って熊手で水底をさらう。襯衣や帽子、靴下を見つけ、さらに深いところで手足の指を見つけ、肋骨、肉の切れ切れ、骨、関節、血管を集める。それから、それらを接ぎあわせてくれるよう「血管の女神」に呪文を唱え、さらに、天神ユーマラに祈る。

「助け給え、ユーマラよ、久遠の神よ、おん身の足速き馬に馬具を付け、おん身の精驛なる馬を装い、櫓に乗りて駆り給え、骨や関節の中を、おお駆り給え、片々に裂けし肉の中を、前や後ろに、血管の中を、それより肉の中の骨を定め、血管の端を接ぎ合せ、骨を縫い給え、おおおん身の銀をもて、金をもて血管を接ぎ合せ給え」。

人の形ができると、レンミンカイネンの母親は塗り薬を求めて、蜜蜂を遣わす。蜜蜂のもたらした9種の膏薬、10種の妙薬を塗りつけたが、なお生き返らせることができない。そこで再び蜜蜂に「天空高く翔け上り、そこの森の蜜を持ち来たれ」と頼む。蜜蜂が持ちかえった軟膏は「創造主がすべての苦痛を癒し給う時、至高なるユーマラが用い給う、全能の膏薬」である。

彼の病患を癒さんとして、挫けし骨にそれを塗り、関節の間に塗り付け、頭にも下身にも塗り、また胴中にも塗り付けて、彼女はかかる言葉もて、次のようにぞ言いけり、

「起きよ、我が子よ、熟睡より、汝の夢より醒めよ、この惡に満ちたる所より、邪惡なる休息所より」

レンミンカイネンは眠りから醒め、すぐに言葉を発して「深き睡に沈みたり」という。母親は彼に死に迫いやったのは誰かと問う。羊飼いが自分を死の世界に落とし、水の毒蛇を自分に投げつけたが、それを防ぐ呪文を知らなかったと白状する。母親は息子の浅き知恵を責め、毒蛇の由来を語る。そして、トゥオネラの白鳥を「安らかに住まわせよ」と云い、「故郷へ帰ることこそよけれ」と説く。

いでや汝は己の幸ある未来を讀えよ、ユーマラは讀め称えらるべきかな、そは救いを垂れ給いて、汝の生命を蘇らしめ、トゥオニの道より汝を導き、マナの国より汝を逃れしめ給いしかば！

レンミンカイネンの母親はこうして死の世界から生還した息子、今生命あることを満腔の喜びとするのである。

IV 結婚 — 乙女の反発

「カレワラ」五十章では登場する乙女たちは何故か結婚することに強い反感をもっている。そのことばが実際の吟唱者たちによって謡い継がれてきたものなのか、それとも編者リョンロットによって

挿入されたものであるかはここでは問わない。この強烈な結婚嫌悪についてはいろいろな憶測が可能であるが、「カレワラ」全体の構成からみるなら、明らかにそれは「レンミンカイネン・サイクル」や鍛冶師イルマリネンの婚礼物語のための伏線となっている。乙女たちが結婚に否定的であるのはまず、老人に嫁ぐことに対してである。兄ヨウカハイネンのために老ワイナモイネンの嫁と定められたアイノは、それを飲む母に自分が悲嘆する理由をこう訴える。

「その弱き歩行を助け、常にかしずき侍りて、年寄の玩具となるよう、老人の慰み者となるよう、おん身が自ら我れに誓わせ、おん身が望むためなり。」

迷いの果てにアイノは入水するが、それでもなお自らの宿命として魚に化して老ワイナモイネンの前に現れる。

「我れがおん身を訪ねしは、鳩のごとくおんみの腕に抱かれ、永遠におん身の傍に座り、妻としておん身の膝に座り、おん身の部屋に火を熾し、大きな柔き^{ばん}麵を焼き、」と主婦の仕事を挙げ、嫁となるべくやって来たのだと告げ、そして再び水中に没する。

また、北方のポホヨラの乙女は老ワイナモイネンの誘惑に抗し、小鳥の囀りに託けて次のように告げる。

「夏の日^{きだめ}は明るけれども、乙女の運命は更に明るし、霜は鉄をも冷やせども、花嫁の運命は更に冷たし。父の家にて乙女子は、庭の覆盆子^{いちご}に似て暮す、夫の家にて花嫁は、つながれし番犬のように暮らす。奴隷になることは余り好からず、嫁になることは決して好からず」

ここでは乙女は老人のもとへ嫁することに対する反発というよりは、現実的な結婚生活が決して明るい喜ばしいものではないのだと吐露する。もう一人、ダンディな放蕩息子レンミンカイネンの嫁となった乙女は、「踊る^{おも}欲いの起るとも、小径を逍遥したくとも、村へさまよい行かざることを」誓ったにもかかわらず、夫の留守に村びとたちのもとへ出かける。若い乙女はまだ遊びたい盛りなのだ。ところが、そのことに逆上した夫は、ポホヨラへ報復の戦いにでかけることになる。

「カレワラ」のなかでは乙女たちの口から語られる結婚は決して喜ばしいことではない。結婚の現実について母親は触れない。ワイナモイネンや若い求婚者には思い及ばない醒めた結婚観である。そして、それが「カレワラ」の構成の上では鍛冶イルマリネンとポホヨラの乙女との婚礼の詩章、殊にそのなかの花嫁の哀泣歌への導線となっていることは明らかである。第二十一章から第二十五章には、婚約から婚礼の準備、婚礼、新婚夫婦の出立までが事細かに謡われるが、それはカレリアの結婚儀礼歌の集成である。

IV 神話・呪文 — 呪的機能としての神話語り

「カレワラ」に見られるいわゆる神話は二話であるが、この叙事詩は豊富な呪文に満ち溢れている。

まず、神話について云えば、最初の神話「天地創造・ワイナモイネンの誕生」（第一章）ではⅡ 1）で記したように天地創造に続いて、大気の娘・水の母イルマタルによって海中に永く胚胎されていたワイナモイネンの生誕が語られる。二つめは「ワイナモイネンの播種」（第二章）である。ワイナモイネンは海に囲まれた島に上がるが、そこは樹のない不毛の国であった。そこへ豊穡神サンプサがやってきて地上の平地、沢、砂地、岩がちの地や谷に種々の樹の種（松、樅、^{はいまつ}匍松、樺、赤楊、桜、猫柳、^{むろ}樅）を播く。ところが、なぜか「ユーマラの樹、櫟の樹」は芽生えない。そこへ海から上がってきた五人の少女が牧場の草を刈り集めて積みあげると、そこへ①トウルサス（海の怪物）が火をつける。草は燃えて灰になり、そのなかに播かれた櫟は芽生え、やがて枝を広げて茂り大木になる。その枝が太陽や月の光を遮るほどになると、ワイナモイネンはその櫟の木を倒す者はいないだろうかという。そこへ海から小人が現れ、「我れは水の豪傑、その櫟の木を倒すため、^{こっば}木片に伐るために来たり」という。小人は見る見るうちに巨人となり、斧をもってその櫟の巨木を伐り倒して、木端にする。その「^{こうこう}悪しき樹が払われし時、また太陽は杲々と照り、快き月の光は輝き、荒れ地は緑もて蔽われ、樹木は生え育ちて茂り、草木の葉は牧場に繁りぬ。」そしてワイナモイネンは浜辺で見つけた麦を播きに行く。すると四十雀が囀る。「オスモの大麦は栄えじ、カレワの燕麦は茂らじ、②森の樹が伐り払われず、火にて焼きつくされざれば」と。ワイナモイネンは斧をもって森の樹を伐り始めるが、一本の樺の樹は鳥たちのために残す。鷲は言う。「いとも賢くふるまい給いぬ、鳥らをそれに棲らしめ、我らを休息させるため、かくも樺の木を立てるままにし、愛らしき樹を伐り給わぬとは」。そして鷲の出した②火が森の樹々を焼き尽くす。それから老ワイナモイネンは種を播き、その生育、実りを地の母や天神ウッコに祈る。

このワイナモイネンの播種のエピソードは明らかに土地の開墾と野焼き（焼畑）という農耕の起源を明らかにしている。そして、それは櫟の種播き、大麦の播種についても同様に繰り返されている。自然の植物や野山の草木に太陽の光、月の明かり、耕地には樹々を焼き払った灰が必要である。世界の諸所ではそれは焼畑農耕と呼ばれるが、ここでは播かれるのは櫟と大麦である。

以上のように「カレワラ」の冒頭には創世と農耕の神話が掲げられている。そして、重要なことはこの神話のなかに呪文が織り込まれていることである。すなわち、大麦の種を播いた後に、老ワイナモイネン、すなわち、文化英雄はまず大地の母に次のように唱える。

「我れは今屈みて種を播く、かの^{つくりぬし}創造主の指よりのごとく、かの全能の手よりのごとく、この里を豊饒ならしめ、麦を育成させんがために。

「低き地の保護者よ、野の古き者、地の母よ、柔らかき目を出さしめ給え。大地をして助けしめ給え。、、、」「起きよ、ああ大地よ、深き眠りより、^{つくりぬし}創造主の野よ、目を醒ませ、柔らかき芽を出させ茂らせ、その茎を伸ばし強めよ、我が耕作と播種によって、あらゆる骨折りの報いとして、多くの穂を実らしめ、なお百倍にも増さしめよ。」

つづいて天神ウッコに呼びかける。

「ウッコ、至高のおん神よ、天にいます、おん父よ、雲らが仕え奉る、散らばう雲の支配者よ、すべての雲を呼び集め、勸めて雲を霽^{はれ}れさしめ、雲を東方より送り、西より他の雲を送り、西北にて一つに集め、南の方を流れしめ、空より軽き雨を降らせ、蜜を滴らしめ給え、麦をすこやかに茂らしめ、その茎を揺れ鳴らしむために。」

すると至高の神ウッコはそれを聞いて、すべての雲を集め、霽^{はれ}れさしめ、老ワイナモイネンの唱えごとの通りに麦は大きく育つ。

ワイナモイネンの播種という農耕の営みのなかで唱えられる呪文は地の母、至高神ウッコに向けられ、人手による働きは大地と天という自然の力に負うところが大きいのだということの明示である。「カレワラ」は呪文によって綴られているといっても過言ではないほど、数多の呪文に溢れている。そのなかには特定の対象に向けられる呪文と事物の起源を説く呪文がある。後者は言うなれば、神話ということになる。例えば、(第九章) 老ワイナモイネンが斧で膝を負傷し、流血の止めるために「鉄の傷を治す人、血の雨に掛け金をかけ、血管^{ながれ}の急流を押さえる人」を探している折に、ある老人はこう叫ぶ。

「創造主^{つくりぬし}の三つの言葉で、深い起源^{おこり}の呪文を唱えれば、さらに大きなものもせき止められ、さらに偉いものも倒される。川は河口で、湖^{うみ}は湖頭で、激しい流れは首の根で、入り江は岬の先で、海峡は最も狭いところで。」

そこで「鉄の起源」が長々と語られる。「大気は原始の母にして、水は最年長の兄であり、鉄は最年少の弟で、火がかかつてその真中だった」とはじまる鉄の起源が説かれると、その後に「鉄を罵倒する呪文」、「血止めの呪文」、「軟膏の呪文」、「守りの呪文」、「包帯の呪文」とつづき、老ワイナモイネンの膝の傷は癒える。ワイナモイネンは全能の創造主に感謝して讃える。

また、(第一五章) ばらばらに切り刻まれたレンミンカイネンの身体は母親の唱える呪文によって復活するが、死因をもたらした水蛇はその起源を明らかにすることによって阻止できたと教える。そして、水蛇は「水から生まれ出た、毒芹の筒は波間から、鴨の優れた脳髓から、海燕の頭の中から」と短い由来を説く。

(第十七章) 呪文の宝庫は巨人アンテロ・ビブネンである。ワイナモイネンは舟造りに当たって思いだすことのできない呪文を求めて、この偉大な知者の口からその体内に入って乱暴狼藉の限りを尽くす。その苦痛から逃れる呪文がいくつもビブネンの口から吐き出され、ワイナモイネンは目的を果たす。そして「今や百の言葉を手に入れた、幾千もの呪文の型も、言葉を秘所から外へ出し、呪文を穴から出した」と云って、舟を完成させる。

「カレワラ」のなかでは神話と呪文とは同一の機能を果たしているといって誤りではなからう。事物の起源を説くことは、すなわち、その当該の事物に由来する現象を露にし、それを抑制し、あるいは

はその力を調伏する。そして、呪文の言葉もまた発せられた通りの事象を実現し、対象となる存在の力を増長させも減退させもする。いわゆる「起源神話」を語ることが呪力を発揮することはアイヌやコリャクの場合にも認められる。^⑦

V 結び

「カレワラ」は多様なジャンルの口承文芸によって編まれた文学作品である。いわゆる神話としては世界創造、麦栽培の起源神話の2章だけであるが、その他の章では事物の起源神話が呪文として唱えられる。呪文はあらゆる登場人物によってさまざまな場面で唱えられ、事の進行や事態の打開解決に効力を発揮する。全体の骨子を支えているのはワイナモイネン、偉大な知恵者・呪師である。ワイナモイネンが登場しない詩篇は「レンミンカイネン・サイクル」と「クッレルボ・サイクル」で、前者は放蕩無頼の若者レンミンカイネンの行状の顛末の話、後者は主人公クッレルボの悲劇的な話である。また、第二十章～二十四章では鍛冶師イルマリネンとポホヨラの乙女との婚礼が事細かに語られるが、口承文芸としてそれは婚礼歌が主であり、ワイナモイネンはそこに招かれて祝福を与える役回りである。

このように「カレワラ」の素材はフィン人の文化や習俗、思考などの多面性を反映する口承文芸にあるが、リョンロットによって編集されたこの作品には「老人」、「母親」、「娘・結婚」という3つのライトモチーフが透けて見える。それはまた、「男性－女性」、「老－若」の対比でもある。ワイナモイネンは生まれながらの老人であり、大地に草木を茂らせ、自ら大麦の種播きをする文化英雄でもあり、そして賢者・知恵者である。その力量は呪歌の歌い手として発揮される。この老人と同様に母親もまた、娘や息子にとって経験豊かな知恵者・賢者として人生の指南者である。他方、老ワイナモイネンは若者ヨウカハイネンとイルマリネンに対置される。若者レンミンカイネンは呪歌を競って敗北し、賢者・知恵者は完膚なきまでこの若者を成敗する。ところが、その老英雄は乙女への求婚では拒絶に遭い惨めな敗北に泣く。約束された花嫁アイノに死なれ、次に求婚したポホヨラの乙女は若い鍛冶師イルマリネンの手を取る。ここでは賢者なる老ワイナモイネンは恋に破れ、老齢を嘆く等身大の人間の姿を顕わにする。^⑧ また、その前後には乙女たちの思いとは別に、アイノの母親も、ポホヨラの乙女の母親もワイナモイネンこそ娘たちに望ましい婿であるといって歓喜する。母親たちはワイナモイネンと同じ老齢組である。ここに母の望みどおりにはならない若者と老人の相克を伏線とする編者リョンロットの深い人生観を見てとることができるであろう。

「カレワラ」の母親はいずれも強烈な個性の持ち主である。そうではあるが、その個性とは母親に普遍的な特徴、言い換えれば、母性の本質であるとも言えよう。老ワイナモイネンの母は若い許婚に死なれて悲嘆する息子に墓のなかから指針を与える。「ポホヨラの乙女を求めよ」と。また、レンミンカイネンの母親はいわばそのどら息子の無謀な思いつきや企てを聴かされる度に、その驕りを諷め

愚行に走らないよう懸命に諭す。にもかかわらず、息子が遂に殺されてトゥオネラの川（この世とあの世の境）に投げ込まれて切り刻まれたことを知ると、鉄の熊手をもって川底をさらい切れぎれの身体を集めて接ぎ、呪文を唱え、膏薬を集め、それによって遂には息子を蘇生させる。子供に対するその一途な思いと献身こそは母性にそなわった深奥なる希求といえよう。それは人間だけではなく、あらゆる生きものにも通ずる母性愛であるかもしれない。編者のもう一つのライトモチーフはこれである。

さて、「カレワラ」の中ほどにはレンミンカイネンの婚礼の物語が挿入されているが、それはとりも直さずカレリアで採録された結婚儀礼歌である。その大きな特徴は花嫁の哀泣歌である。この決別の歎きの歌は葬儀や戦場への出征に際しても共通する。アイノや乙女たちの結婚に対する反発はこの花嫁の哀泣歌へ導くための伏線と解することができ、ここにもまた編者リョンロットの卓越した創造性が認められる。

最後に「カレワラ」は果たして英雄叙事詩であろうかということについて付言しておきたい。ユーラシアにおける多様な英雄叙事詩に共通する主題の一つは花嫁を求める遠征である。老ワイナモイネン、レンミンカイネン、鍛冶師イルマリネンがボホヨラへ旅をするのは妻覓である。そこでは女主ロウヒによって結婚の条件が示される。第一はサンポの鍛造であるが、それがイルマリネンによって完成されると、女主人はさらに難題を課す。また、レンミンカイネンは辛苦して課された二つの条件を満たし、三つめの課題で落命する。老ワイナモイネンとレンミンカイネンの願望は成就されなかったとはいえ、イルマリネン共々三者の遠征が妻覓であり、求婚難題を伴っているという点で「カレワラ」は英雄叙事詩といえよう。^⑨

「カレワラ」が文学作品であることは疑いをいれない。しかし、それは口承文芸を素材として組み立てられ、編者の強烈な思いが込められて編纂されている。にもかかわらず、「カレワラ」はフィン人、フィンランドの民族的な叙事詩として享受されてきている。「記録」され「編集された」「口承文芸」に今なお「伝承」が脈打っていることに思い至るのである。^⑩

① 「カレワラ」の素材は 18、19 世紀にカレリアの人々に伝承されてきた Rune(古謡)である。それはリョンロットによれば、長い時代を超えて数多の歌い手たちに歌い継がれ、創りあげられた詩篇や物語、呪文などであり、そのなかには中世キリスト教などの影響が色濃く残されている [Pentikäinen 1989 : 83-84]。

② 文献② 小泉保による概説 ; J.Pentikäinen(tr.and ed. by Ritva Poom) *Kalevala Mythology*. Indiana University Press.1989

③ Väinämöinen 音訳はワイナモイネン(森本訳)、ワイナミョイネン(小泉訳)。本稿ではワイナモイネンとする。

④ 翻訳について

森本覚丹訳と小泉保訳には処々に解釈の違いがあるが、筆者はフィン語の原文を照合することに非力であるためにそのいずれを採るかについて判断をもてない。それゆえ、両者の間に大きなずれがあ

る場合にはその部分の引用を避けることとした。また、小泉訳は現代文であって明快ではあるが、「カレワラ」が本来吟唱される叙事詩ということから言えば擬古的な森本訳がよりその特徴に即していると考え、引用は森本訳を採ることとした。

⑤ 小泉訳では「不滅の賢者よ！聖なる言葉を解いてくれ、あんたの呪いを外してくれ！」とある。

⑥ サンボは「カレワラ」の主題の一つである。ポホヨラの女主人ロウヒはサンボの条件を次のように述べる。

されどもしおん身にして、白鳥の白き羽毛より、妊まざる仔牛の乳より、

牝羊の毛の一本より、大麦の一粒よりサンボを^{つく}鑄造り、その多彩の覆いを鍛え給わば、
我が娘をおん身に与えん。

⑦ コリャクの呪文が創造神の経験を語る神話であり、それを唱えることによって怪我や病を治すことができる〔荻原 1992〕。また、アイヌの場合にも類例がある。〔校正のときに入れます〕。

⑧ ワイナモイネンの特徴については多くの議論がある。テキスト全体を通じて印象づけられるもっとも顕著な特徴は神話や呪歌の語り手である。第四十一章、四十四章ではワイナモイネンのカンテレの妙なる調べに人ばかりでなく、ありとあらゆる生きものたちが聴きにやってきたとするオルペウスに比肩する状況が語られる。仮に神話を語ることがいわゆるシャマンの属性であるとするなら、その限りでワイナモイネンはシャマンであるということになる。

⑨ ユーラシアに見られる英雄叙事詩に共通する特徴の一つは妻覓の遠征、冒険である。〔荻原 2011 参照〕

⑩ 「いわば、数百―数千年にわたって変遷をこうむりながらも、連綿と語り継がれてきた神話（ミューース）の熱きマグマは、有形の『神話』として存続しうるためには、その書記化の過程で冷めたロゴス（説明と関係の論理構築）への変貌を強いられる」〔水野 2002：9―10〕。この意味では『古事記』は「神話」に当てはまるが、「カレワラ」は神話を部分的に構成要素とする英雄叙事詩的な「文芸作品」ということになるであろうか。

参考文献

荻原眞子

「(資料) 言葉のカーコリャク族とチュクチ族の呪文」『口承文藝研究』第15号 p.121-134 1991

「英雄は幼な子―英雄叙事詩における神話について」『説話・伝承学』第19号 p.1-20 2011

小泉 保 『カレワラ神話と日本神話』 NHK ブックス 1999

三浦佑之 『古事記を読みなおす』筑摩書房 2010

水野知昭 『生と死の北欧神話』松柏社 2002

リョンロット編・小泉保訳 『フィンランド叙事詩 カレワラ 上・下』岩波書店 1976

森本覚丹訳 『フィンランド国民的叙事詩 カレワラ 上・下』講談社学術文庫 1992 (1983)

J.Pentikäinen(tr.and ed. by Ritva Poom) *Kalevala Mythology*. Indiana University Press.1989

Finnish Epic “*Kalevala*” – An Interpretation as a Literature Work

Shinko Ogihara

Key word: Elias Lönnrot, epic, myth, Väinämöinen, old age, mother, marriage, charms

As it is well known, the “*Kalevala*” was compiled by Elias Lönnrot based on runes, folk traditions collected among the Finns in Karelia, Estonia and Finland. The first publication was issued in 1833, the second called “*the Old Kalevala*” – in 1835 and the third “*the New Kalevala*” – in 1849. *The New Kalevala* of fifty poems has two Japanese translations: one by Kakutan Morimoto(1937), the other by Tamotsu Koizumi(1976). The Morimoto’s edition was made in pseudoclassical style that, we may say, sounds more like runes sang by singers. While the Koizumi’s translation is in colloquial language and abundant in detailed explanation and notes based on the *Kalevala* studies in Finland and other countries.

From the point of view how the oral tradition could be made up as a literal text, I took an approach to conceive the *Kalevala* as a literature created by E. Lönnrot. Much argument has been done concerning the composition, themes of the *Kalevala*. Indeed it contains different sources of oral tradition. At the beginning we read two cantos of poem-myth. The first one tells the creation of the world, the second - the deed of old Väinämöinen as a cultural hero, who covers by chanting charms the surface of the earth planting trees, every kind of plants and wheat. Then there are three cycles: Lemminkäinen cycle, Kullervo tragedy and Wedding songs. It is clear that these cycles are originally independent, not related to the hero old Väinämöinen. When these poems are excluded from the text, there the Väinämöinen cycle left.

Studying the Väinämöinen cycle, I found there are some leitmotifs with which E.Lönnrot undoubtedly worked out composition of *the New Kalevala*. Those leitmotifs are as following: aged man, mother and marriage. The epithet for Väinämöinen is “old”, and he as a suitor every time laments own failed proposal of marriage because of his being old. The mothers are of the old Väinämöinen, Joukahainen, Aino, Lemminkäinen and the mistress of the Pohjola. All these mothers are bright and wise, warm-hearted, give appropriate advice and help to their sons and daughters. The leitmotif of marriage, including the attitude of maidens against it, functions as an axis for all the different materials of oral tradition to be woven into a masterpiece as a Finnish epic.

Based on an assumption to look the *Kalevala* as a literature work, I found there a clear theme

as heroic epic. The paper illustrates an interesting case of textualization how oral materials could be made up as a literal work.